久米島の戦争

「泣きたくなったら、久米島へ来たらいいさぁ〜。」

久米島町観光協会作成のパンフレットの表紙は、青い空と青い海をバックに、にこやかな女性が一人佇む。「実家よりあったかい、ゼロになれる島」というキャプションがつく　久米島観光ガイドブックのページをめくると、久米島の旅のプラン、グルメ情報が満載だ。

だから私は今日、このパンフレットには書かれていない久米島の戦争の話をあなたにしようと思う。

「痛恨の碑」

那覇から西へ 100Km、那覇空港から飛行機なら 30 分、離陸してシートベルト着用のサインが消えたと思ったら、着陸準備のために再び着用サインが点灯する慌ただしいフライトで久米島空港に到着した。出迎えてくれた現地ガイドの佐久田勇さんの案内でバスを降りると、一面がサトウキビ畑だった。この日のために佐久田さんがサトウキビを刈って作ってくれた道を進むと目的の碑が目の前に現れた。

天皇の軍隊に虐殺された久米島住民・久米島在朝鮮人　「痛恨の碑」である。ツアー参加者の一人が「天皇の軍隊に殺された、ってちゃんと書いてある。」と声をあげた。碑には殺された人たちの名前も一部刻印されている。

「痛恨の碑」

米軍上陸

久米島に米軍が上陸したのは 1945 年 6 月 26 日の朝である。島の東海岸イーフビーチから艦砲射撃をすることもなく無血上陸した。島民はみな山の奥へ奥へと蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。沖縄本島に鉄の暴風を浴びせた米軍が、なぜ久米島に攻撃をすることがなかったのか。仲村渠明勇（なかんだかりめいゆう）さんがいたからだ。仲村渠さんは沖縄本島の小禄（おろく）飛行場にいた時に米軍の捕虜となり、金武村屋嘉（きんちょうやか）の収容所に入れられた。

米軍が久米島に上陸することを知った仲村渠さんは、地元住民に犠牲者を出したくないと自らが案内人となり、米軍とともに上陸して住民の降伏を説得することになった。

米軍が上陸した「イーフビーチ」

日本軍による住民虐殺

当時、久米島にいた日本軍は、海軍の通信隊である鹿山正（かやまただし）が率いる三十数名のみだ。米軍は上陸翌日、村の電信係だった安里正次郎（あさとまさじろう）さんに降服状を日本軍に持って行くように命じる。断ることも出来ずに日本軍に届けた安里さんを、鹿山は米軍のスパイだとみなし自ら銃殺した。

その 2 日後の 6 月 29 日に北原区（島の北部）で 9 人を殺害する。13 日に一時的に偵察上陸した米軍に拉致されて解放された人たちを直ちに引き渡さなかったことで届出を怠ったとして区長や警防団長を含む 9 人を針金で縛り銃剣で突いて殺し、家と一緒に焼いた。

虐殺をするのは見せしめである。だから残酷であればあるほど効果的だ。

米軍はさかんに住民に投降を呼びかける。「下山する者には危害は加えない。山に立てこもった者は日本軍とみなし砲撃する」

これに対して山に立てこもった鹿山隊は「下山する者は米軍に通ずる者として殺害する。住民はいかなることがあっても山にとどまれ」と言う。鹿山隊にとっては、住民が山から下りてしまうと自分たちの身が危うくなるので、何としても住民を山から下ろさずに楯として使いたい。

そんな思惑の中で、住民は右往左往する。さんざん皇民化教育をされ、鬼畜米英だと信じ込まされている。米軍を易々と信じて出て行くことは簡単なことではなかったと想像される。そんな中で地元出身の仲村渠さんの呼びかけは響く言葉だったに違いない。

昨年刊行された『久米島町史』には、当時の役所の日誌や警防団長の日誌、農業会長の日誌が掲載されている。陣地構築のために労働力として住民を出すことや食料の提供を度々求められる実態が綴られている。「鹿山兵曹長民衆を脅迫す　民衆が山から出て住家に帰れば山に残る者は軍人だけと云ふことなり　米軍の掃討には便利である　それで女をつれてにげまわッている鹿山には山中人無くては都合がわるい」「鬼畜の如き鹿山兵曹長のことだからむしろ米軍より危険率は多い」「皇軍は完全に山賊と化し民衆の安住を妨害す」「自己の安逸をむさぼる鹿山兵曹長いつまでにげまわるつもりだらうか」等々鹿山の自己保身を糾弾する文章も並ぶ。鹿山は 17 歳になる現地の少女を連れまわしていた。

日本軍の沖縄駐屯と久米島来島、敗戦後・・

1944 年夏以降、32 軍の沖縄駐屯が本格化した際、司令官牛島満（うしじまみつる）は「現地自活に徹すべし」「地方官民をして喜んで軍の作戦に寄与し進んで郷土を防衛する如く指導すべし」との方針を示し「現地物資を活用し一木一草といえどもこれを戦力とすべし」と訓示している。

鹿山正が久米島に隊長として来島したのは、この年の 10 月だ。支配者としてやりたい放題だったことがわかる。

村役場前で日本敗戦の玉音放送が流された 3 日後の 8 月 18 日に、多くの久米島住民を救った仲村渠明勇さんがイーフ浜で殺された。妻と 1 歳の子も斬殺のうえ家に放火された。

後に鹿山はこのことに対して火葬してやったのだと暴言を吐く。

その 2 日後の 8 月 20 日、朝鮮・釜山出身の具仲会（ク・ジュンフェ→日本名：谷川昇）さん夫婦と乳幼児を含む 5 人の子どもが虐殺された。妻のウタさんは具志川村上江洲（ぐしかわそんうええす）にある自宅から 10 歳の長男和男さんの手を引き、乳飲み子を背負って逃げようとしたところ日本刀を持った兵に背後から襲われ 3 人とも切り殺された。家にいた長女の綾子さん（8 歳）と次女八重子さん（3 歳）はナッコーと呼ばれる近くの森に連れ出され絞殺された。次男の次夫さん（6 歳）と鳥島に避難した谷川さんも見つかり縄で縛られ海岸まで引きずられた後、次夫さんと共に殺された。

沖縄本島宜野湾市にある佐喜眞美術館（1994 年開館）に丸木位里・丸木俊夫妻が 1983 年に制作した沖縄戦の図がある。その中の一つ、久米島の虐殺（２）に描かれた首に縄をかけられて引

きずられている人物が谷川昇さんである。引きずっているのは民間人に偽装した鹿山隊の一人だ。

東京経済大学名誉教授の徐京植（ソ・キョンシク）さんは、昨年末にハンギョレ新聞のコラムで「釜山出身だというこの一人の朝鮮人は、どのような経緯で日本の沖縄まで流れてきたのか。沖縄人女性と所帯を持ち子供を育てるのにどんな苦労と喜びがあったのか。殺害される瞬間、どんな無念を噛み締めたことか。最後に朝鮮語なまりの日本語で、妻や幼い子の名を呼んだだろうか？故郷釜山の風景が脳裏をよぎっただろうか？ 戦争とは、こうした一つ一つの無念、憤怒、絶望、悲嘆の集積である」と記している。

「久米島の虐殺(2) おきなわの図」＝佐喜眞美術館貯蔵//ハンギョレ新聞社

谷川さんは土地を持てなかったため農業が出来なかった。鋳掛屋（古金属の回収や修理をする仕事）やスクラップ集めをして米軍兵舎の近くを歩いたりしたため「スパイだ」とされた。『久米島町史』には久米島の人々の戦争体験が 71 人の証言で残されている。その中には、谷川さん一家が誠実な人柄であったことを示す言葉も多い。

『久米島町史』より

① ウフクビリの鹿山隊陣地安里正次郎さんが殺害された場所

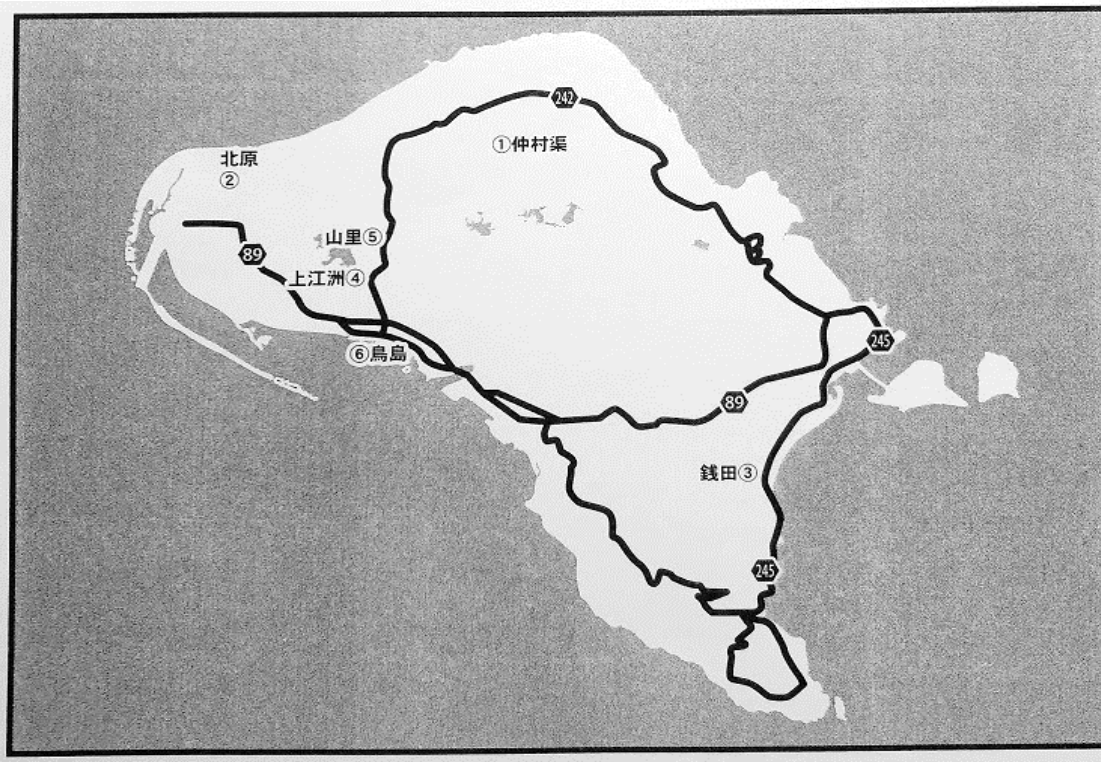
② 警防団長他９名が殺され家ごと焼き払われた場所

③ 仲村渠明勇さん一家３名が殺され放火された場所

④ 谷川ウタさんと子ども２人が殺された場所

⑤ 谷川さんのお嬢さん２人が殺された場所

⑥ 谷川さんと次男の次夫さんが惨殺された場所



地図番号42

上田森公園の「慰霊顕彰碑」

「慰霊顕彰碑」に刻まれた谷川昇さんとご家族の名前

『久米島町史』の第４章では鹿山事件に関する国会での質問と答弁が取り上げられている。鹿山事件について最初に国会で本格的に取り上げたのは瀬長亀次郎（せながかめじろう）だ。復帰前の琉球政府時代の1971年11月15日、国政参加特別措置法に基づいて行われた選挙で当選した衆議院議員定数５名のうちの一人が瀬長亀次郎である。

1971年４月４日の衆議院決算委員会で、鹿山による虐殺について具体的に述べ、週刊誌のインタビューでの鹿山発言、北中城村（きたなかぐすくそん）の抗議決議、そして残虐行為に対する見解や法的措置を政府に問うている。同じく６日にも鹿山事件を取り上げ、遺族への補償、関係者の証人喚問、久米島事件をはじめとする沖縄戦における日本軍による住民虐殺に対する政府の統一見解などを質問した。カメジローは日本軍による住民虐殺が久米島だけではないこと、沖縄県祖国復帰協議会、沖縄県教組、労働組合、民主団体が旧日本軍人の犯した罪悪、蛮行、野獣のごとき行動を全部調査するために委員会が出来ていると知らせている。

鹿山正は戦後徳島市に住み、農協参事、管理部長として勤めていた。所在を突き止めた週刊誌の記者に久米島住民の集団虐殺について「弁明をしたいとは思わない。日本軍人として最高指揮官として当時の処罰に間違いがあったとは全然思っていない。現在になって法的に、人道的に悪いといわれても、それは時代の流れとして仕方ない」鹿山隊の常とう手段だった「みな殺しにして放火」したことについて「あれは家と一緒に火葬にしてやった。あとかたづけをするように村長に命令した。安里電信保守係の処刑は私自身が短銃で一発撃って、一発では苦しむから両側から銃剣で突かせた」と少しも悪びれた様子はなく虐殺のもようを平気で語る。「ワシは悪いことをしたとは考えていないから、良心のかしゃくもない。日本軍人として当然のことをやったのであり軍人としての誇りを持っていますよ」と胸を張り、取材した記者をあきれさせた。

こまででも怒りに震えるが、私が衝撃を受けたのは鹿山の次の言葉である。久米島の印象について「島は小さかったが食糧はかなりあった。ことばは琉球語であるが、日本の教育を受けているので不自由はしなかった。那覇は知らんが久米島は離島で一植民地である」

鹿山正を糾弾して済むことではない。「軍隊」とは何か、を考える必要がある。一植民地と言い放つ圧倒的な差別意識、支配する者は何をしても許されるという特権意識を生み出す構造こそが問題なのだ。鬼畜は日本軍だった。

戦争をさせないために

多くの戦争体験者は、証言の最後に二度と戦争は嫌だ、　戦争をしてはいけない、という。私も同感だ。それならば、沖縄戦を学んだ者として戦争をさせない方法を考えてみたい。戦争になれば相手の攻撃を封じるために真っ先に狙われるのが基地だ。南西諸島を第一列島線と位置づけ、仮想敵を作って武器を爆買いし威嚇することは住民を危険に晒す。今ある基地は撤去し新しい基地を作らせてはいけない。

戦争をするためには逆らわない心と丈夫な体が必要だ。「日の丸・君が代」を強制し、教職員や生徒に起立という形を取らせることで次第に服従させていくことは戦前と同じだ。道徳の授業を教科化し特定の価値観を押し付け、子どもの内心に干渉してはいけない。

植民地支配の謝罪も反省もなく授業料の無償化から朝鮮学校を排除するのは差別以外のなにものでもない。

不条理極まりない日米地位協定を見直せと一度も要求したことのない政府が「日本国憲法」を改悪し再び戦争への道を開こうとしている。武力で他国を威嚇することなく、今こそ憲法９条を活かし、対話外交をする政府が必要だ。

泣いてなどいられない。選挙に行こう権力者を監視するために。主権は私たちにあるのだから。

2022 年 6 月 1 日　嶋田由加里

参考文献：『久米島町史 資料編１ 久米島の戦争記録』国会図書館蔵